

土木学会誌 99巻をふりかえる

第8回 (1985～1994) 「座談会 学会誌と学会のあり方」 (土木学会誌第七十一巻第八号、1986)

土木技術のあり方を「考える」会誌へ

山口 敬太 正会員 京都大学大学院 工学研究科 助教

学会誌編集の苦心

土木学会誌71巻8号(1986年)の特集「学会のあり方」は、「時代への要請に対応する土木学会活動の活性化方策」の議論の一環として企画された。本特集のうち再掲記事として取り上げた座談会「学会誌と学会のあり方」では、それまでの学会誌の位置づけのほか、公正な誌面づくり、編集権の問題、編集の苦労、今後の学会ならびに学会誌のあるべき姿などが議論されている。本稿では、1974(昭和49)年から編集委員長を務めた高橋裕の発言を主に取り上げているが、その発言からは水害訴訟や住民参加などの問題、コンクリートの早

期劣化問題など、土木が直面した問題に真摯に向き合った編集委員らの苦心と想いを伺い知ることができる。

土木学会誌の編集にも歴史がある。

1956(昭和31)年に論文の独立を経て、八十島義之助・編集委員長時代(1962～1965年)に一新し、特集号が生まれ、座談会や対談などが大幅に増やされた。八十島は、「(それまで)会誌の編集もとかく受け身で、届いた原稿を取捨して登載を決めれば事終わりとの感があつた」なか、「委員の諸氏と相計って、なんとか、意図をもった編集にもってゆこうと、工夫、苦心を重ね」た、と

後に述懐している。⁽¹⁾ この学会誌改革以後、会員のための雑誌ということにより徹底された。

岡村甫委員長時代(1988～



写真1 青函トンネル貫通(土木学会誌70巻4号、1985)

表1 土木学会誌歴代編集委員長(1962～1994)(79巻11月号(1994)より一部抜粋)

代	就任年	編集委員長	年	就任年	編集委員長
24	1962	八十島 義之助	32	1979	中村 英夫
25	1965	樋口 芳朗	33	1981	椎貝 博美
26	1966	増岡 康治	34	1984	松尾 稔
27	1968	森 茂	35	1986	木村 孟
28	1970	千秋 信一	36	1988	岡村 甫
29	1972	天野 光三	37	1990	中村 良夫
30	1974	高橋 裕	38	1992	松井 三郎
31	1977	浅川 美利	39	1994	角田 與史雄



YAMAGUCHI Keita

1980年兵庫県生まれ。2009年より現職。専門は土木史、景観計画および地域計画。

座談会 学会誌と学会のあり方

高橋 裕 東京大学教授、第30代会誌編集委員長

松尾 稔 名古屋大学教授、第34代会誌編集委員長

公正な誌面づくり

高橋—会誌というのが論文集と分かれた段階で、会員のための雑誌ということに徹底しなきゃならんと思いました。

最初、37年（注、昭和、以下同様）から43年まで幹事をしていた段階でもいろいろ工夫して改革され、私が編集委員長をしたのは49年から52年ですが（…）中の囲み記事とか年間を通した連載記事とか、やや編集技術的な細かいことも含め学会誌のイメージを変えるためにいろいろ工夫をし、また、方針も若干変えさせて頂きました。例えば、まだ結審になっていない水害訴訟問題を取り上げたんですが（注、61巻10号、1976）、これは大変抵抗がありました。

「そんなものは学会誌で取り上げないほうがいい。学会誌というのは権威がなきゃいかん」。つまり、学会誌に載るものは学会の公式意見であるべきで、学会の立派な正確な報告だけを載せるのが学会誌だという空気が強かったと思うんです。

ジャーナルというのは、一面では正確な情報提供の場でなければなりませんが、今日のように価値感（ママ）が多様化しているような時代は、討論の場としても存在してしかるべきものであると思います。

ですから、水害訴訟などのような事件が起こっていることを、河川以外の、あるいは当面しているお役所以外の人も知ってほしいと同時に、一体そこにどういった問題点があるのかというのを、土木技術者という立場から解説し考える場にしたいと思ったわけです。

それを最初載せましたら、原告側から一方的な意見であるという大変なお叱りがあり、その後原告側いわゆる住民側の主張も入れました。それを入れるかどうかが大議論がありましたが、官と違う立場の意見も載せてどこに問題点があるかということ

を会員にわかってもらいたいという趣旨です。一部には不評でしたが、私はそれが学会誌を土木以外の人たちにも評価してもらえるし開かれた姿勢だと考えたわけです。住民参加問題の特集も賛成でない方がありましたが昭和50年ごろ住民運動が非常に盛んになっていた段階で、どこに問題があるかを土木技術者は知るべきだという観点でした（注、62巻7号、1977）。同じお役所の土木技術者の間でも、いろいろ意見が違いました、実際に活字にする段階においては、実は議論やら修正やらごたごたありました。

つまり、学会の公式意見だけが学会誌に載るのではなくて、こういう価値多様化の時代には、興味本位になってはいけません、学会誌の一部が討論の場になってもいいと考えました。

松尾—最近の例を申し上げます、「コンクリート・クライシス」といいますか、ジャーナリズムはどんどん取り上げているのに学会誌ではふれてなかった問題に対し、思い切って昨年の11月号（注、70巻11号、1985）に誌面を提供しました。いろんな立場の人に公平な場で議論を聞かせて頂く。抵抗は確かにございました（笑）。おかげさまで各方面から総じて好意的な反応を頂いております。

高橋—（…）ああいう問題こそ学会誌が取り上げるのにふさわしいと考えております。

（中略）

松尾—私は同好会誌とは考えていない。つまり、何が何でも読んでくれさえすればよいという姿勢にはなれない。

時間つぶしに目を通すが、10分後には忘れてしまう、そういう雑誌であってよいとは決して思っていない。週刊誌ではないから必要になったら読み返せる。そこからまた情報や知識が吸収できる、そういうものでなければならない。

今後の会誌のあり方

高橋—いまや、専門分化はいよいよ進みまして、若い研究者たちはとかく論文を作るのに忙しくて、こんなものを丁寧に見てはいられない気持の人が多い。ところが、専門分化の弊害が実は大きくて自分の狭い専門しかわからない。それは、その部分の学者としては通用するでしょうし、あるいは実務としても、ある部門だけという人も必要だけれども、土木というものが総合技術という性格が非常に強いと考えますと、土木という学問というか技術の特殊性からいって、やはり総合的に見る目を持った土木技術者がたくさん育つことが、今後の土木技術を発展させ、土木工学を本当に広げていくんだと思うのです。

ですから、こういう土木学会誌を読むことこそ、土木技術者になる最低限の条件だ。それに応える学会誌を歴代作っていると思うのです。これがすぐ明日の役に立たないからという感覚では、これからの土木技術者は困る。まさに学会誌に載っているようなことが共通の知識だという考え方に一人でも多くの土木技術者になって頂くことが、土木を発展させるために大事なことです。

多くの土木技術者が学会誌を読んで、お互いに共通認識を持つことが、今後の土木界を支えるゆえんであり、それに耐える学会誌が編集されているし、今後いっそうそれが重要だと思うのです。（…）

さて、具体的に今後の学会誌への希望ですが、あえて二つの問題に絞ります。（…）国際的なことと楽しい雑誌です（…）国際ニュースを充実させ、土木学会誌を読んでいると、世界の土木の重要な話題の要点はわかるようにしてほしい。（…）楽しませるといことは、一つは若い人の感覚、それから地方の末端のニュースが入るようなもの（ですね）。

（土木学会誌71巻 8号より一部抜粋）

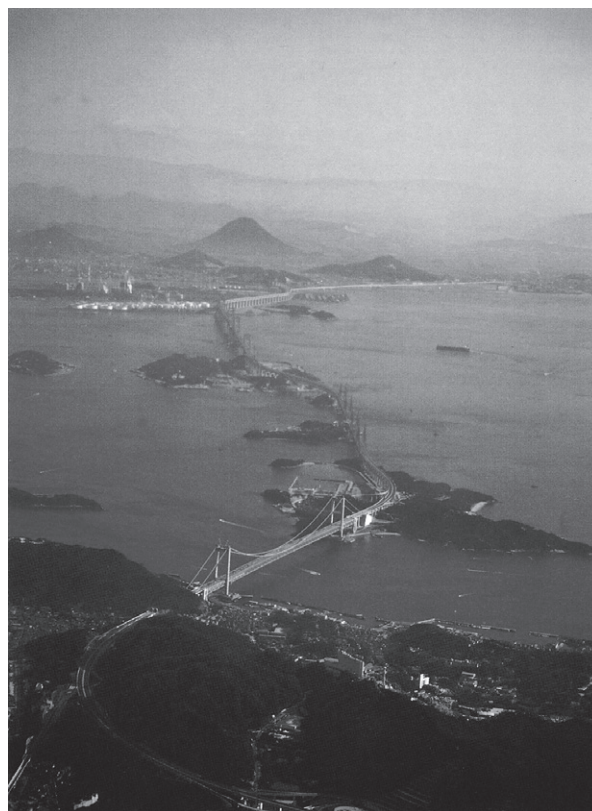


写真2 本州四国連絡橋「瀬戸大橋」(土木学会誌73巻4号、1988)

1990年)の1989年からカラー化し、特集号である別冊増刊を刊行して編集方針の明確化を図った。岡村は「学会誌は読み終わったら捨ててもらうものと考えて、10年くらいは保存して頂ける特集或いは特定の機能を持つ内容(年次講演会、総会など)は別冊としました」と述べている。

新たな土木技術のあり方を模索して

この座談会において、なぜ「学会のあり方」を問わねばならなかったのか。この時代、青函トンネルや本州四

国連絡橋などの国家的大プロジェクトに日本中が沸いていた。その一方、経済の成熟にともなう価値観の多様化を背景に、自然破壊や環境問題などの種々の問題が顕在化し、一部は住民運動に発展するなど、「土木」の存在意義が根本から問われる状況に直面していた。

実際には、1960年代からこれらの問題は学会誌上にもしばしば取り上げられるとともに「新たな土木技術」のあり方が問い直されてきた。土木学会50年の特集「土木界 これからの課題」(1965年)では産業と生活の基盤づくりに止まらず、人間

表2 土木学会誌の主な特集(1985~1994)

年	巻	主な特集記事・別冊等
1985	70	「日本の土木技術 2001年への飛翔」、「土木と建築 明日をどう描くか」、「民間活力考」、「土木構造物は永遠か 壊す背景と技術」
1986	71	「新しい土木の出発 文明・文化考」、「雪国新時代」、「学会のあり方+コンピュータ」、「土木と環境」
1987	72	「日本のプロジェクト'87」、「地下空間利用の現状」、「新しい鉄道に期待する」、「地方新時代を考える」
1988	73	「外国人から見た日本、日本人、日本の土木技術」、「高度情報化社会と土木」、「本州四国連絡橋」、「リゾート開発と土木」、「ウォーターフロントの再生」、「シビックデザイン 身近な土木のかたち」
1989	74	「リニアモーターカー」、「新しい時代の防災(別冊)」、「建設コンサルタントはいま(別冊)」、「国土計画(別冊)」
1990	75	「建設労働事情」、「地球環境とシビルエンジニア(別冊)」、「新たな国際化時代を迎える建設事業の理解のために(別冊)」、「近代土木の保存と再生(別冊)」
1991	76	「21世紀へむけての土木教育(別冊)」、「アメニティと空間」、「ごみと土木」
1992	77	「21世紀社会に向けたエネルギーと土木(別冊)」、「構造デザイン(別冊)」、「エコ・シビルエンジニアリング読本(別冊)」
1993	78	「技術開発と評価(別冊)」、「土木と企画」、「人工島(別冊)」
1994	79	「これからの地域づくり」、「地球共生時代の土木」、「豊かな国をつくる(別冊)」



図1 土木学会誌別冊増刊号の表紙(左から、構造デザイン、エコ・シビルエンジニアリング読本、人工島、豊かな国をつくる)

生活そのものの良質化の必要性が唱えられ、その模索は土木計画学研究委員会の創設(1966年)にもつながった。同委員会発足時の委員会報告においては、土木の計画問題が従来の自然科学的方法のみでは処理し

切れない問題を含んでおり、社会科学を含む境界領域の開拓こそが、総合的工学としての土木工学の意義の再認識のきっかけとなる、と指摘されている。⁽¹⁾土木の社会に与える影響力の大きさが強く自覚され、その後も土木学会60年の特集「転換期にたつ土木60年」(1975年)や特集「技術開発のすすめ」(1979年)など、学会誌上においても土木技術のあり方が広く議論されてきたのであった。

考える「会誌」へ

高橋裕(1974～1977年に会誌編集委員長)は、このような困難な時こそ土木学会誌を「考える会誌」にすべきだと考えた。高橋は「会誌のあり方と明日の学会誌」(1976年)において、「将来の重要課題を先取りし、その哲学を探るのが、会誌の重要な方針」であり、「合意の結論が出ていないからといって、問題を避けるのではなく現存する問題を積極的に提示したい」、「会員個人の考え方、立場によって異なる主張なり意見も、それが会員相互の鍛錬になるならば、おおいに取り上げるべきで

ある」と、その学会誌編集の方針を述べている。⁽²⁾土木技術者自らが、こうした問題に向き合い、自ら考えることが重要であるとの認識からであろう。

その後も土木学会誌は「考える会誌」として、あるべき土木技術の模索の場をつくってきた。特集「日本の土木技術2001年への飛翔」(1985年)の会告には、企画主旨として「土木技術者らが「あるべき21世紀の社会生活—それを支える公共施設群のありよう」につき、十分な討議と成果を持ち合わせていないこと」に対する自責が述べられている。

また、特集「新しい土木の出版・文明・文化考」(1986年)の会告には、編集委員会のメッセージとして、「あるべき21世紀の社会生活は、それを支える公共施設群のありようはいかなるものか」、「人の幸せとは何か、それではそれらを補完する土木とはなんだろうか」という問いが発せられている。そして、1980年代半ば以降、「新しい」技術のあり方を探る特集が次々と組まれた。その視点は環境、歴史・文化、国際化、情報、景観、デザインなど多岐にわたった。

一方、国や地域づくりのあり方

も議論され続けた。たとえば、座談会「国土計画 何が基本問題か」(1989年)では、経済的繁栄の成果の影に、東京への一極集中や、地方において魅力的都市をつくるという観点から抜けていたことが反省点として挙げられ、今後の国土計画の変革のありようが議論されている。

土木学会誌は、バブルの膨張と崩壊という時代の大きなうねりのなかにおいても、新しい問題領域の開拓のため、また国づくり地域づくりという総合化のために、⁽³⁾考える会誌として間断なく編集され続けてきたのである。

参考文献

- (1) 八十島義之助…会員のための学会誌、土木学会80年史編集委員会編『土木学会の80年』、286頁、1994年
- (2) 土木学会誌75巻7号、1990年
- (3) 八十島義之助…つぎの時代の土木 まえがきと要約、土木学会誌50巻1号、1965年
- (4) 高橋裕、加藤晃…土木計画学研究委員会の発足に際して、土木学会誌52巻9号、1967年
- (5) 土木学会誌60巻1号、1975年
- (6) 土木学会誌64巻1号、1979年
- (7) 土木学会誌61巻4号、1976年
- (8) 土木学会誌70巻1号、1985年
- (9) 土木学会誌71巻1号、1986年
- (10) 土木学会誌74巻14号、座談会「国土計画何が基本問題か」(天野光三、中村英夫、森地茂、三木千壽)、1989年